

平成7年度言語研究センター共同研究計画 〔漢字漢語の諸問題〕の採択にあたって

外国語学部 教授 松本 昭
教授 松村 文芳
教授 望月 真澄 (代表)
講師 浅山 佳郎

この度、上記の私共プロジェクトチームに研究予算が認められ、早速始動のはこびとなった。先ずこの11月29日には東京外大講師の星実千代氏を招いて「現代チベット語ラサ方言の発音と文字の関係について」の演題で、チベット語の表記に関する初歩的な研究を始める予定である。

望月は、かつて「中国の文字と言語」(1982大修館刊『広漢和辞典』)で、同じ〔風〕fengを形声符号に持つ〔嵐〕がなぜlanという発音を採用するかについて、それを〔風〕を表すチベット語の書面語rlungと関連付けて考察したことがある。言語系統論からシナーチベット(中国蔵緬)語族が言われるが、この方面の実証的研究は皆無の情況とあってよく、なおそれでいて極めて重要な研究対象であるはずで、これに挑戦していかほどの進展が期待されるか、今はチョモランマ登頂計画者が直前に味あうであろうような緊張した気分にあるところである。

音韻対応法則は解明されるか。Bernhard karlgrenが試みた上古音を基礎にしたWord Familyに寄与する何かを得られるか。が、当面のテーマである。

浅山は、江戸時代の日本人による漢詩における和臭の問題に関心があり、中国語本来の意味と訓読におけるそれとの意味差の解明に努める。当面、荻生徂徠・伊藤仁斎など江戸前期における助辞の日中両国における用法差の整理解明に着手したい。

松村は、現代漢語の語彙が統語論の中でどのような役割を持つかをコンピュータのテキストデータベースを用いて調査研究する。

松本は、河野六郎先生の『文字論』のより一層の具体化のかたちで、現代中国語における音声の実態と文字表記との関係を考察し、理論の一層の具体的展開を試みる。

(文責 望月)

〈編集後記〉

ニューズレターを所員とセンターを結ぶメディアにという発想を具現化せん！と思ってはじめてのですが、本年度第1号の発行がこんなに遅くなってしまいました。言い訳はいくつもありますが、ひとえにニューズレター担当者の怠慢とお許し下さい。早くに玉稿をいただいた所員の方には申訳なく、また無理を言って書いて下さった方々にも含めて、玉稿をありがとうございました。

私たちの言語研究センターとして育てていくために、もっと関わりを！とお願いいたします。

(MT)